

# OPINION オピニオン・スライス SLICE

## 今が最悪かは、 今決めることやない

HIDEKAZU AKI

俳優/近畿大学ボクシング部総監督

### 赤井英和さん

— 近大ボクシング部の関西学生リーグ1部昇格、おめでとうございます。

ありがとうございます。

— 2012年にボクシング部を再開する際に、赤井さんが総監督になられたきっかけは？

4万人の署名を我々みんなで集めて、校外の清掃活動をやったりしながら、私が当時の世耕理事長にお願いに行ったんです。そしたら、「あなたが総監督をするならば復部を認めましょう」と言うてくださったので、もう躊躇なく、「分かりました。是非よろしくお願いします」ということになりました。

— 窮地に追い込まれた組織を、赤井さんが自ら率先して復活させたということになるんだと思います。実は我々弁護士業界は閉塞感が高まっていて、弁護士会の求心力の低下が問題になっています。

弁護士さんは個々お仕事していらっしゃるし、横のつながりというものはなかなか難しいんじゃないですか。争う立場になる人たちが「横のつながり」というのはね。

プロボクシングというのは個人スポーツで、個人がリングに上がって戦うだけで、練習でも1人でサンドバッグを打ったり、トレーナーとミットをやったりします。でも、大学ボクシングは、みんな同じ時間に集まって、みんなで走って、みんなで練習をやって、みんなで終わる。合宿にしてもそうです。試合もチーム丸一となって応援する。そういう意味では、仲間意識というものがすごく強くありますし、心が折れそうなときでもみんなの熱い応援によってプラスαの不思議な力が出たりするものなんです。私もそういう中で育ってきましたし、今の学生たちもそういうふうな意識を持ってやっ



ています。

私が大学で実際に試合したのは1年のときの1年間しかないんですけど、その1年間でもすごく強烈にその思いは持ち続けております。もちろんリングサイドには、私の先輩方、後輩もたくさん応援に来てくれて、ずっと胸には近大の校章が張りついているという気持ちでいました。

— 赤井さんが怪我によるドクターストップでプロボクサーをやめざるを得なくなったとき、赤井さんをサポートして下さる方はいらっしゃいましたか。

サポートはい wasn't でしたね。もうやめるしかしゃあない。まあ、生きてるだけでも儲けもんかぐらいやったですね。でも、自分の中では、青春をかけて15歳のときからずっとやっていたボクシング、当時は仕事でもあったわけですから、それがなくなって、明日から何もすることがない、どないしようかと。

— 退院されたころは、何も将来を考えられない感じでしたか。

毎日することがないんですから。先輩や先生方、社長さんとか後援して応援してくださっている人のところに「退院しました。これからのことはゆっくりと考えますけど、まあ今はゆっくりと、でも体は元気に回復しております。どうもいろいろとお世話になりました、ありがとうございました」と、

忙しそうにいろいろなところに挨拶に行ったりしていましたが、実質何の仕事もしてませんわね。

そこにありがたいことに、9月30日かな、近畿大学から、嘱託職員としてボクシング部のコーチになってくださいという辞令をいただいたんです。こんなうれしいことはありませんでしたよ。当時は引退したばかりですから体も動きますし、学生たちとぶつかり合うような本当に熱い熱い練習を重ねまして、3年間近大のコーチをさせていただきました。学生たちは一生懸命頑張ってくれました。3年のうち2回日本一になりまして、指導する立場になってリングの上の学生とリングの下の私が同じうれし涙を流せる、近畿大学はすばらしい仕事を与えてくださったと思ってすごく感謝しておりました。

その後、1988年の末、講談社からあなたの今までの人生を本にしないかと言われました。それで、子どものときからやんちゃやったり、ボクシングをやったという私の半生を「どついたるねん」という本に書いたら、小さい小さいヒットですよ。関西を中心にちよこっと売れて何部か増刷したのかな。

そしたら、それをご覧いただいた阪本順治監督が、「どついたるねん」という映画を、赤井英和主演で赤井英和の話をつくらうと言って私のところに来ていただきました。

今、プロボクサーを引退して31年です。昔は若いから目線が低くて自分の目の周りしか見えへんかったけれども、だんだん年齢がたって56歳になって目線がちょっと高くなって広い範囲が見えるようになりましたら、25のときの最後の試合でけがをしたことがきっかけで、「どついたるねん」の本ができて、映画ができるようになった。ほんなら、あれはピンチやなかったんや、チャンスやったんや、それで今があるねんと。役者という仕事で演じるというのも、「どついたるねん」がきっかけで続けることができるようになりました。

だから、今、若い学生たちに、おまえら今最悪やと思うたりすることがあるかもしれんけど、分からんぞ、今そうやって決めることやない、もうちょっと時間がたったら、俺はあんな思いしたけどあのときはチャンスやったんやと思えるから、そういうふうに思いなさいということをお伝えしております。

—— **ボクシングと俳優業は全く違うように思うんですが、赤井さんの中ではその2つはどういう位置づけですか。**

大学ボクシングというのは仲間です。プロは1人でやる。今の役者、俳優、タレント、いろんな仕事をしておりますけれども、みんなでつくるものなんです。テレビやスクリーンに映ってるのは俺やけども、それにはその何十倍、何百倍という人たちがかわって、音をとる人、絵をとる人、光を当てる人、メイクをする人、演出する人、それを宣伝する人、切符を売る人、もうそれ何百倍という人の中でできた総合芸術が今の映画であったりテレビであったり舞台であるわけです。そういう「みんなでやってる感」というものが非常にお

もしろい。だから、団体競技ですわね。それは近大ボクシング部の仲間たちと同じような感覚で仕事できています。

—— **弁護士一般に対してイメージはいかがですか。**

困ったときの神頼みやないけども、非常にすがれる、非常に助かる、味方、そういう意味では心強い、頼もしい。

—— **うれしいと同時にプレッシャーも感じますね。**

—— **赤井さんはいろいろなCMに出演していらっしゃるんですが、その経験から弁護士の広報について、アドバイスをお願いします。**

きちっとしたスーツを着て、「任せておいで」というような気持ちでスマイル。信頼感であり、親しみであり、距離感であり、安心感でありでしょうね。

—— **「絶対勝てる! かかってこいや」みたいなのはどうでしょう。**

それももちろんあるかもしれませんが、クライアントのご要望にお応えして、こうしましょう、ああしましょうというのを自分の中でいろいろなアイデアを絞り出してね。

—— **日々、学生と接しておられて、最近の若者の特徴などは感じられますか。**

私は学生時代から世界一のトレーナーと言われるエディ・タウンゼントという先生にずっと教えてもらって、彼は非常に愛情の多い人です。私たちの学生時代でも「今の若いもんは」と言われましたし、今も「今の若いもんは」とかいわゆると言うけど、そんなことはないです。今、学生たちとつながっていて、彼らは非常に真面目に一生懸命に情熱をかけています。だから、「今の」云々はないと思います。これから先も将来も「今の若いもんは」と先輩なんか言うかもしれないけど、そんなことはないと思います。

愛情の一方通行ってあり得ないと思うんです。「よっしゃ、ナイスパンチ」と言うたら、真剣に返してくれますので、愛情をかけてやったことには愛情が返ってくる。俺はエディさんにすごく愛してもらった。バチンとパンチを打って「ナイスパンチ!アカイ、Good Job!」と言われてたら、はあはあ言いながらも「ようし!」とまだ力が出るというもので、だから私も学生たちに愛情をかけようとしていますし、若い者がどうやこうやということはありません。そういうことを言うのはあんたが愛情かけてへんからやないか、「若い者」と言うな、どあほという気持ちですわね。

それと、私の先生のエディさんは顔をさわったり体をさわったり、俺のことを一生懸命見てくれてるねんやということを感じるようにスキンシップされました。だから、僕もスキンシップは大切に今も学生たちにしております。

—— **依頼者との関係でも参考になるところも…**

依頼者にさわったらあかんよ (笑)

(Interviewer:蝶野弘治、国本聡子 / Photo:武田真実)